水のおはなし

伏見の昔話 第2集

不二の水
藤森神社

伏見の昔話を掘りおこす会

私たちのまち伏見は、かつて「伏水」と書いていた時期がありました。
それは、地下深くに豊かな水脈があり、いたるところに、
おいしい井戸水や、湧き水がみられたからです。

水にまつわる言い伝えもたくさんあります。
水をめぐるうるわしい心、すがすがしい心、少し悲しい心・・・
取り上げました六つのおはなしから味わってみてください。

「御香水と猿」

「茶碗子の水」

「白菊の井戸」

「醍醐水」

「小町恋しの水」

「弘法杖の水」

伏見の昔話を掘りおこす会

挿絵　藤田輝二

伏見の昔話第２集「水のおはなし」ガイド

「御香水（ごこうすい）と猿（さる）」

御香宮神社――京阪伏見桃山駅・近鉄桃山御陵前駅・ＪＲ桃山駅下車、いずれも徒歩5分以内

「茶碗子（ちゃわんこ）の水（みず）」

深草野手町。京阪深草駅から東に約300メートル。ＪＲ稲荷駅から南東に約400メートル

「白菊（しらぎく）の井戸（いど）」

伏見板橋小学校南門より入ってすぐ。京阪丹波橋駅･近鉄丹波橋駅下車
小学校から南に約150メートル、伏見区役所の北側に「金札宮」がある

「醍醐水（だいごすい）」

醍醐寺は地下鉄醍醐駅下車徒歩約10分、又はバス「醍醐三宝院」下車。醍醐水のある上醍醐までは約3.5キロ
徒歩約1時間

「小町恋（こまちこい）しの水（みず）」

欣浄寺。京阪墨染駅下車、南西へ徒歩約3分

「弘法杖（こうぼうつえ）の水（みず）」

地下鉄石田駅から徒歩15分。小栗栖の石田幼稚園の山手側の深草に抜ける急な山道を３００メートルほど
入った右手

御香水と猿

　みなさんは、猿回しって知ってますか。
お猿さんに、いろんな芸を教えて、皆にみてもらう。
平安時代八六三（貞観四）年、この頃は楽しみっていうものが少なかったんです。
だから、猿回しの人たちが近くに来てくれたりすると、みんなは喜んで見に行きました。
　ある日、伏見の町に猿回しの女の人がやってきました。
少し疲れているようです。
その人は、日本中を旅して歩いていたので、その疲れで、とうとうお宮さんの前で動けなくなってしまいました。
「これは、たいへんだぁ」と感じたのはお猿さんです。
猿回しの肩からピョンと飛び降りると、
「キョロキョロ、クンクン」と神前近くに湧き出ている水を見つけてピョンピョンピョン、湧き出ている水の所に行き両手ですくいピョンピョンピョン、水がこぼれないように、両手をしっかりとくっつけて、倒れている猿回しの元へ行きます。
猿の手からは、ポタポタと水がこぼれ落ちています。
それでも両手をしっかりくっつけて、水がこぼれないように必死です。
　わずかに手に残った水を猿回しの口へ、唇が少し湿ったようです。
それを見届けた猿は、また急いで湧き水の所に走っていきました。
そして、水を両手ですくい、水がこぼれないように、ピョンピョンピョン、倒れている猿回しの所へ行きます。
猿回しの口に水がポタポタと落ちました。
身動き一つしなかった猿回しの顔が少し動いたように見えました。
猿は、嬉しくなり、また、水を運んできました。
猿回しの口に注いだ水が、胸元にしたたり落ちました。
すると、どうしたことでしょう。いい香りが四方八方に広がっていきました。
倒れていた猿回しは、気がつき、猿に導かれて湧き水の所にたどり着くと夢中になって猿とともに水を飲んだそうな。

「なんと、おいしい水だこと」
猿も猿回しも、たちまち元気になったそうな。
「ああ、ありがたや、これは神のお力に違いない
助けて頂いたお礼に、私どもの芸をご覧ください」そう言って
感謝の気持ちを表すために、神前で猿回しをして、奉納したそうです。

この話が都にまで伝わり、清和天皇が、この宮を、
御香宮（ごこうのみや）となづけられたそうな。
この御香水を飲むと、病が癒えると伝えられるようになったそうです。

茶碗子の水

昔、都に住んでいた茶人は、使用人に宇治まで水をくみに行かせていました。

ある日のこと、いつものように使用人が宇治まで行って、宇治橋から水をくみあげ、深草まで帰ってきたところで何かにつまずき転んで水をこぼしてしまいました。

「ああ、大変なことをしてしもうた。どうしよう、ご主人様に叱られてしまう。ああ、また宇治まで戻らなならんのか」

しょんぼり肩を落とし、しばらく座り込んでしまいました。

宇治まで戻ろうと、桶を拾い上げたその先に

「あっ、あんな所に井戸が」

疲れていた使用人は、

「今日だけは、この水でお許しを」

一人つぶやきながら、その水を持ち帰りました。

何も知らない茶人は、その水でお茶を立てて飲むと

「今日のお茶はいつもの水とは違うな。おい、この水をくんで来たものを呼べ」

使用人は、叱られると思いビクビクしながら茶人の元へ

「お、お呼びでございましょうか」

「うん、今日の水はいつものとは違うようじゃが、宇治川の水か」

「へえ、あのう、そのう」

もじもじするばかりの使用人に茶人は

「わしは、叱っているのではない、正直に申してみよ」

「へえ、いつものように宇治川まで水をくみに行ったのでございますが、帰りに転んでしまい水をこぼしてしまいました。また、宇治川まで水をくみに行かなければと思っていたところ、近くに井戸があったもので、つい、その水をくんで帰ってきてしまいました。申し訳ありませんでした」

「そうか、いや正直に話してくれたな。ケガはなかったか。それにしてもよい水だ、どこの水じゃ」

「へえ、深草にある井戸の水でございます」

「そうか、明日からは宇治まで水をくみに行かなくてもよい、今日の水をく

んできてくれ」
「へえ」叱られると思い込んでいた使用人は、力が抜けて、へたへたとその場に座り込んでしまったそうな。
「ああ、明日からは宇治まで行かなくていいんだ、ありがたや、ありがたや」
この水はいつしか茶碗子の水と呼ばれ、名水として後の世に言い伝えられるようになりました。

石峰寺近くにあるこの茶碗子の水は、地域の人たちだけでなく、後々伏見街道まで木管でつなぎ、往来する旅人や牛馬の飲料になっていたと伝えられています。

白菊の井戸

天平勝宝(七五〇年)のある日、孝謙天皇が歩かれていると、西の空がピカーッと光輝きました。
「あの、ヒカリモノはなんだ」
「はあ、流れ星かと」
「あのような、おおきな流れ星は、見たことがない
何か、不吉なことが起きなければよいが
今年は、雨がふらず、日照り続きで、民も困っているというに、
なんとも不吉な流れ星じゃ」
天皇は、深く憂慮されました。

そのころ、伏見の久米の里では、里人が、このあたりでは、あまり見かけぬ翁に声をかけていました。
「いやあ、見事な白菊ですな」
「いやいや、なんの」
「いや、ここまで育てるには、たいそうなお手をかけられたでしょうな
それより、今のヒカリモノをご覧になりましたか」
「見事な流れ星でしたなぁ」
「今年は、雨がふらず、日照り続きで百姓はみんな困っているというに、
何か悪いことが起きなければいいんですがね」
「なあに、水のことなら心配はいらぬ。ほうれ　このように
『豊かな秋を喜び、白菊をめでてきた。干天で稲が枯れるときには、白菊の露を注ごう』」と言って、翁が手にもった白菊を打ち振ると、たちまちに清水が湧き出たそうな。
「困ったときには、この水を使うがよい」
「ああ、ありがたや、皆喜びまする。あなた様は、どなた様でございますか」
「わしは、太玉命（ふとたまのみこと）と申す」
「太玉命様とは、知らぬこととはいえ、大変な失礼を、申し訳ございません」
里人は頭を下げて詫びました。

「なあに、気にするようなことではない」
そう言って翁は去って行かれました。
おかげで、きれいな水が田圃に入り、飢饉をまぬかれて豊作になったそうです。
この話を伝え聞いた天皇が、『金札白菊大明神』と直筆の書を里人に与え、『金札宮』の社殿が造られたと伝えられています。

この白菊の翁のお話が伝わる井戸は、金札宮の境内にあったのですが、かれてしまい、今は、ありませんが、かつて金札宮があったと伝わる板橋小学校内に一九九〇年に井戸が掘られ、白菊の水として子どもたちや、地域の人たちに親しまれています。

醍醐水

むかし、弘法大師の孫弟子にあたる理源大師（聖宝）が、修行の場を探し求めて旅をしていました。

ある時、伏見の深草、貞観寺（じょうがんじ）に泊まっていた時のこと

東南の方に、五色の雲がたなびいている山が見えました。

「あれは、なんだ。雲が色づいている。なんと不思議な、何かの知らせであろうか、すぐにでもあの地に行ってみよう」

理源大師がその山を登っていくと、山頂近い谷あいに見知らぬ老翁が現れました。

老翁が、落ち葉をかき分け、その下から湧き出た清水を、

「ああ、醍醐味なるかな」と言って、おいしそうに飲まれました。

「私にも一口頂けますかな」

「うまい水じゃよ」

「本当においしい、これが醍醐味というものですか」

「醍醐味、醍醐味　ハハハハハ」

「この前、この山の上に、五色の雲がたなびいているのを、ご覧になられましたか」

「五色の雲とな」

「はい、私は、聖宝と申します。私が修行の場を探しております時に、この山に五色の雲がたなびいているのを見て、この地が霊験あらたかなる地に違いないと思い、尋ねて参りました」

「よくこられた。私はこの笠取山の地主の神、横尾明神である。貴僧が、ここに精舎を建て、修行に励むならば、この地を貴僧に進上しようぞ。そして、私は、守護神となりて、見守りましょうぞ」

そう言うと、姿を消してしまわれたそうです。

「有り難きお言葉。心して修行に励みまする」

理源大師は、山頂に草庵を造り、修行に励みました。

この『醍醐味』という言葉から、この地が醍醐となり、醍醐寺の名前の由来になったと伝えられています。

みほとけに供する閼伽（あか）は
千歳へて峯のまほらに
今も湧く水　　（如実）

＊閼伽＝仏に供える水

＊昔話が伝わる井戸は、たくさんの所が枯れてしまっているのですが、醍醐水は、今も飲むことができます。

小町恋しの水

墨染寺（ぼくせんじ）や欣浄寺（ごんじょうじ）のあるあたりは、昔は深草少将の邸宅があったといわれています。
広い邸宅の中には、いくつもの井戸があったそうです。
今も残っているのが、欣浄寺の遺愛の井戸（小町恋しの水）です。

深草少将といえば、小野小町に恋焦がれての百夜通い。

むかし、小野小町という大変美しく、賢い女の人が、随心院あたりに住んでいました。
小町のところには、毎日毎日たくさんの恋文が届いたそうです。
小町に一目会いたいと、訪ねてくる者もたくさんいたそうです。
深草少将も恋文を送ったり、会いにも行ったそうですが、小町は会ってはくれませんでした。
それでも、少将はなんどもなんども会いに行ったそうです。
ある日のこと、小町の使いのものから、
「小町様からのお言葉でございます。
『これから、百日連夜、私（小町）を訪ねてくれば、あなたの思いを受け入れ、お会いいたしましょう』とのことです」
その言葉を聞いた少将は、喜び勇んで帰り、その夜から大亀谷を越えて、小町のもとへ通い続けたそうです。
雨の降る日も、嵐の夜も、少将は一日も休むことなく小町を訪ねました。

もう何日小町の元へ通ったことでしょう。
「少将殿、お顔の色がすぐれません。今夜は雨風もたいそうきつい、今日は体を休められては」
「母上、私はもう何日あの方のもとに通ったのでございましょう、
あの方に一目お会いしたい、その思いで・・・
あの方が会って下さるまで、何があろうとも私は、通い続けます。
それが、あの方との約束ですから」
日に日にやつれていく少将を、周りの人たちはどうすることもできません

でした。

「ああ、やっとあの方に会える。嬉しい」

そう言って少将は涙を流されたそうです。疲れきった体は、もうボロボロでした。それでも、小町への思いを胸に、足を引きずりながら歩を進めましたが、百日目の夜、大雪のなか、途中でとうとう息が絶えてしまったそうです。

少将が小町を思い流した涙が清水になり『小町恋しの水』と呼ばれたりしたというお話が伝わる井戸が欣浄寺の『小町姿見の池』と呼ばれた池のそばにあります。

この井戸のそばには、

『通う深草百夜情　小町恋しの涙の水　今もわきます欣浄寺』と

詠んだ　与謝野晶子の歌が記されています。

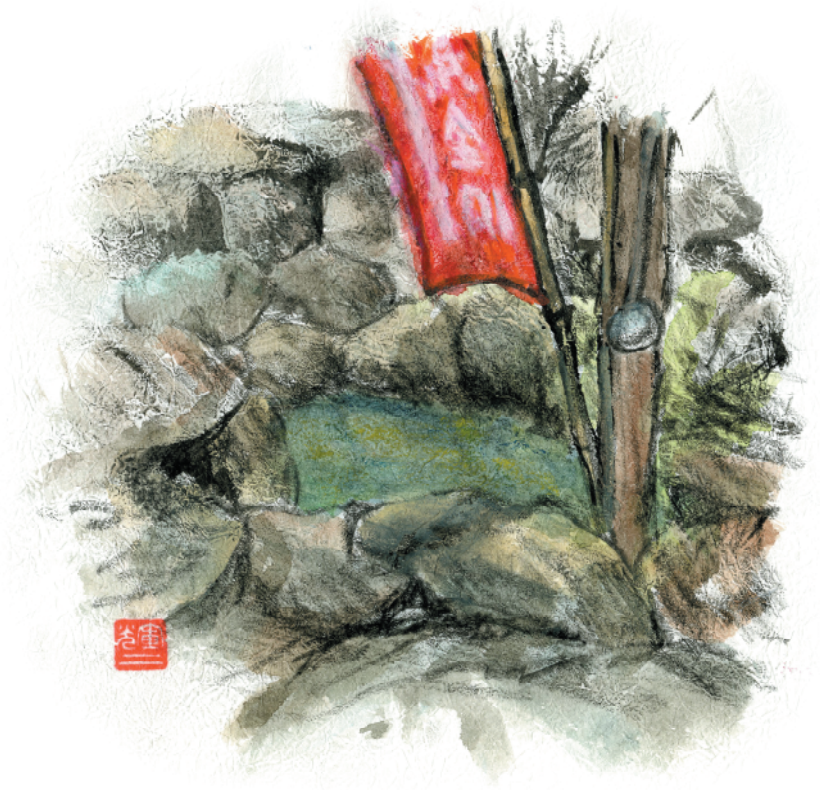
弘法杖の水

むかしむかし、弘法大師が、全国を旅していたときのお話です。
「ああ、のどがかわいた。水を一杯飲みたいものだが」
あたりを見回してみても、民家もなく、水の湧き出ているところもなく
一休みしていると、水を持ったおばあさんがあらわれました。
「水を一杯恵んでもらえまいか」
「まあ、旅のお坊様、どうぞお飲みください」
「かたじけない、これで一息つきました。ありがとうございます。
この水はどこにありますか」
「はい、ここから一里半ほど行った所にございます」
「えっ、いやぁ、そんなに貴重な水を頂戴してしまって、
申し訳ありません」
「いやいや、困ったときはお互い様、この辺りには、
水の湧き出る所がないので、旅のお方は　お困りでしょう」
「毎日この水をくみに、この山を越えていくのですか」
「はい、年寄りなもんで、たくさんの水をくめませんよってにな、
毎日使う分だけこうやってくんできますのじゃ」
「そんな大切な水を、私に分けてくださったのですか、ありがたき幸せ。
ところで、あなたは、この近くにお住まいですか」
「はい、すぐそこに家がございます」
「そうですか」
そう言うと、弘法大師は、すっくと立ち上がり、
山の裾野の落ち葉をかき分けて、持っていた杖でコンコンとつくと、
どうしたことでしょう、
水がこんこんと湧き出てきたではありませんか。
「どうぞ、明日からは、この水をお使いなさい」
「あなたは、どなた様でございましょう」
「ただの、旅の僧じゃよ、では、これで、おいしい水を馳走になった」
そういうと、去っていかれました。
「ありがたや、ありがたや」
そういうおばあさんの目からは嬉し涙があふれていました。

それからは、おばあさんの水汲みは大変楽になりました。
また、旅人にも喜ばれたそうな。

＊弘法杖の水は、地域の人たちによって、お休みどころが、造られて、
大切にされています。

＊また、この「弘法杖の水」のお話は、全国に千数百箇所もあると伝えられています。



伏見をさかなに ざっくばらん

伏見の昔話・第 2 集 『伏見の水のおはなし』

編集・発行　伏見の昔話を掘りおこす会
連　絡　先　電話・FAX 075・622・8144（稲継）
発　行　日　2014年3月15日

●「伏見の昔話を掘りおこす会」は伏見区役所が主催する『伏見をさかなにざっくばらん』に参加するプロジェクトです。